目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた3

狩野景
挿絵／天鬼とうり

あとみっく文庫

立ち読み版

登場人物紹介

退魔師を生業としている一族の分家筋に生まれた少年。何の因果か「鬼斬姫」に選ばれ、身体を女体化させて鬼と戦うことに。女体化した時は、正体を隠すため「はるか」と名乗っている。

遼のクラスに転校してきた男の娘。女の子のような可愛い外見だが、退魔師としてかなりの力を持っている。

遼と結女の幼なじみの少女。「羅刹童子」という鬼が転生した姿で、一時は鬼に意識を乗っ取られていたが、はるかの手で救われた。遼に片思いをしている。

遼の従妹で、恋人。鬼の贄となる「鬼慰姫」として狙われている。おっとりとしていて、人をあまり疑わない性格である。

あらすじ

ある日、目覚めると身体が女になっていた一条遼。彼（彼女?）は、鬼に贄として狙われる「鬼慰姫」に選ばれた従妹の結女を護るため、「鬼斬姫」に選ばれて女体化してしまったらしい。女の感覚に戸惑い、辱められながらも、幼なじみの希美乃の身体に宿る強大な鬼神羅刹童子を封じるはるか（＝遼）。平和な日常を取り戻したかに思えたが、今度は男の娘退魔師の伊音が現れ、希美乃を危険視して襲い掛かる！　はるかに女体化した遼は、伊音と激しい戦闘を行った末に和解し、伊音の指導によって、錬気を操る訓練を始めることになったのだった。

「そ、そういう場合はサポーターパンツで固定しないと……」
女装を好むだけにその感触は伊音にも理解できた。ブルマの裏地はすべすべと心地よすぎて普通の下着程度じゃ刺激が強すぎる。しかもしっかりとペニスを固定して身体に押しつけるように収めないと、形が浮かび上がるし身体を動かしているうちにずれてしまう。
「知らないわよっ、そんなこと！　あたしは女の子なんだからっ‼　それより早くここから出てってよっ！　こんなの、恥ずかしい。女の子なのに、こ、こんな……ッ‼」
収まらぬ勃起に顔を真っ赤に染めて、希美乃は伊音を追い出そうと声を荒らげる。
「ご、ごめん！　今、出て行くからっ‼」
むしろ男のままの方が役に立てたかもしれない。性別にこだわりのない自分としては、彼女のいきり立ったペニスを慰めて鎮めてあげられただろう。
（でも……無理だよ、そんなのっ‼　ちょっとしか見えなかったけど、結構大きかったし、お……おちんちん……ッ）
肉体が女性化し羞恥の感覚が過敏になった今は、ブルマから亀頭を覗かせて脈打つペニスを見ているだけで気が動転する。愛液の分泌を意識した股間が、ますますじゅくじゅくとヌメりを帯びて悩ましい疼きに苛まれた。
（また、ぼくの身体ッ、女の子の反応しちゃってる！　希美乃さんも女の子、なのにっ‼で、でも、おちんちん……あるから？　ああもうっ、なんで、いちいちこんな気持ちにッ。男の子の身体の時は、ドキドキするのも楽しかったのにっ‼）

女の身体になった今は、困惑の方が大きい。すぐに顔が赤くなって逃げ出したくなる。
ベッドから急いで降りようとしたその時、
「希美乃、大丈夫？　何だか苦しそうにしてたけど……。えっ、伊音……くんッ⁉」
はるかが幼なじみを心配して保健室へと様子を窺いにきた。
驚き顔の眼差しが、ベッドの上で顔を真っ赤に染めて恥じらう女体化男の娘と、その正面で向かいあい、割座して股間を隆起させている少女を交互に見る。
「ご、ごめん。邪魔しちゃった」
思いっきり誤解したようだ。慌てて出て行こうとする。
「待って！　違うからっ‼」
「おわっ、い、伊音くん⁉」
大急ぎでベッドから飛び降りると遼を追いかけ、無我夢中で保健室の中へ連れ戻す。
ドアを閉めると伊音は内側から鍵をかけた。
「こ、これはそうじゃなくてっ！」
自分は遼のことが気になっているし、希美乃もどう見ても彼に幼なじみ以上の感情を抱いている。誤解を解かなくてはとはるかに詰め寄った。
「ば、ばかあっ！　なんでそいつ中に入れちゃうのよっ‼」
その伊音へと希美乃から非難の声が浴びせられた。
驚き見ると彼女は身を乗り出し、カーテンを閉めようと手を伸ばしていた。だがその体

勢が窮屈なブルマに無理をかけた。
すでに亀頭を覗かせていた怒張が、すべやかな布地をつるんと押し下げる。
「――ひっ⁉　い、いやっ！　だめ、見ちゃっ‼」
カーテンに指が届かぬうちに、ブルマがその下のショーツごと脱げ落ちてペニスが全て露わとなった。
再びぺったんとベッドにへたり込み、希美乃が慌てて両手で男根を隠そうとする。
「ひうっ！」
だが剛直したペニスの生の感触が彼女には耐え難かったようで、慌てて離すと途方に暮れて指先を漂わせる。
「な、なんで、これ、こんななる、のよ……。あたし女なのに、エッチなことなんか考えてないのに、勝手にこれっ、こんなっ。いつまでたっても、全然、収まらないからっ」
遼と伊音を睨みつけ、見るなっ、とっとと出て行けとばかりに視線で威圧する。
だが二人がこの場を去ったとしても、怒張したペニスはなかなか収まりそうにない。
もし勢いが弱まったとしても、もう一度ブルマを穿けばその感触でまた狂おしい充血状態に戻るだろう。
（やっぱり、ぼくが）
傍らのはるかはただ戸惑うばかりだ。
どうすればいいのか自分が一番よく分かっている。

今の姿での精神状態だと、考えただけでも恥ずかしくてたまらない。
けれど希美乃はそれ以上に、恥ずかしい思いを今しているのだ。
「男の子のあそこはね、えっちなこと考えなくても、ちょっとした刺激だけで大変なことになっちゃうんだよ。ね、遼くん」
覚悟を決め、羞恥に赤く染まった顔に小悪魔的な笑みを浮かべ、本来の自分を演じる。
「え……、あ、う、うん、伊音くん」
声の震えを抑えて傍らの女体化少年に話を振ると、頬を染めて恥じらいながらも同調してくれた。いきなりこんなこと言って、呆れられただろうか？　でも元の姿ではもっと破廉恥な言葉で彼を戸惑わせてきた。思い返すと恥ずかしい。
いや、今はそんなことを考えて悩んでいる場合じゃなかった。
「そして一度火が付いちゃったら、きちんと満足するまでなかなか収まってくれないからね。鎮まるの待って我慢してても、余計に悶々し続けるだけ……」
勃起少女の表情が不安げに曇る。
「だから、希美乃さんの、その男の子の部分、ぼくらが慰めてあげるから」
ベッドの傍らまで進み行き、彼女の股間へと唇を寄せる。
男の姿の時は自分から遼のモノを咥えたくらいだから嫌悪感はなかった。ただ、女になってからはエッチなこと全てが恥ずかしくてたまらない。
しかも恥ずかしさが強ければ強いほど、女の子になった身体がウズウズと切ない疼きを

覚え、エッチな反応を示して恥ずかしさが倍増するという悩ましい循環を起こしている。
（うううう、こんな近くに、おちんちん……が。そ、それも、希美乃さんの、お、女の子の、おちんちんっ。ふぁあぁ、もう、頭おかしくなりそうだよ……）
立派な逸物を勃起させているのが、活発そうな美少女なことも興奮の羞恥に拍車をかけた。味わいたい。でも恥ずかしくて死にそう。希美乃からの視線も、羞恥に喘ぐ心を狂おしく抉り、その切なさが子宮を疼かせ愛液を滴らせる。
「――!!　ちょっと、あんた、なに、を……!?　やめ、ひあっ！」
近づくと汗混じりに発酵した生臭い匂いが鼻腔を満たす。その香りにはいつも以上に抵抗を感じない。むしろとろりと脳裏を蕩かせて恥じらいを和らげた。
慌てふためく希美乃が後ずさろうとするがそれを逃さず、唾液を滴らせて開いた口中に、熱帯びて打ち震える彼女の剛直を頬張る。
「ひっ、あっ!!　そんな、とこッッッ!!　ひゃめっ」
希美乃の背筋が打ち震えた。逃げようと引きかけた腰がもう動かせない。
充血に硬度を増した弾力肉の淫靡な感触がぬるぬると伊音の唇を滑る。狭い口中はたちまちいっぱいに満たされ息苦しさを感じたが、それがそのまま充足感へと転化した。
穂先を鏃型に尖らせた肉竿の節くれ立った幹肌が味蕾に触ると、生臭さがしょっぱい味わいとなって広がる。
「んふっ！　ふぇあぁ～」

少女となった肉体がゾクっと戦慄いた。
舌先で絞ったように括れる亀頭の雁溝を掘り返す。
――れちゅ♪
「くぅ――――――ッうううぅッ！　あ、あああぁはっ!!」
途端に、性器だけが逆転した元気娘が切なく眉を寄せて左右に首を振りたくる。
「お、あ、あああぁ……」
刮げ落ちた恥垢ごと唾液に溶けた生臭風味を吸い込むと、背筋を震わせながら亀頭の先からねっとりとしたカウパーをたっぷり溢れさせてくる。
「んく、ん……はふ、あ、あぁ、おいひぃ♪」
喉を鳴らし、そのヌルヌル汁まで飲み下すと牝化した身体が昂りを増した。
（ああ、こんな……感じ、なんだ。男の子の姿で舐めるのと……ぜ、全然、違う。しゃぶっただけで、お腹の、奥……、凄く、熱くなるっ）
元の姿ではただ興奮が高まるだけだったが、女の身体だとそれ以上の衝動が異性の性器によってもたらされる。
（全然、違うんだ……性別、変わっちゃうと。女の子、だと、おちんちんが、もっと素敵に……なる。こ……こんな恥ずかしいのに、欲しくて、たまらなくて……。はぁあぁっ）
身体から沸き立つ女の感情に、男のままの心が翻弄されつつ魅了される。
性別が変わったことで、ペニスに対する欲求が比べようもないほどに膨れ上がり、悩ま

しい気持ちが胸を満たす。最初から女であったら当たり前に受け止めて気がつくことすらなかったであろう昂りに、伊音は感極まって身を震わせた。

「ほ……ほらぁ、遼くんも、希美乃さん、慰めて、あ、あげなくちゃ。まだこんなに、コチコチに硬くて、切なそうなんだから……」

「う……、うん……、でも……。確かに……希美乃の、おちんちん、つらそうだけど……」

元々同性との行為が抵抗なかった伊音とは違って、いたってノーマルな性癖であり男相手は抵抗がある。その上、幼い頃から親しい少女の股間から立派な男性器が生えているという状況に戸惑っているのだろう。遼は思いきれずにいる。

「ボクは、男相手とか、ダメだし、それに希美乃は、幼なじみ、だから……。で、でも……このままだと、た……大変だから。これは、し、仕方なく……だから」

顔を真っ赤に染めながら、言い訳を羅列する。

「そ……そんな、いやなら、別にッ」

その態度に、何もしてくれなくて結構と希美乃がむくれかけた時、

意を決した様子で、遼が唇を寄せてきた。

「ひっ⁉　ああ、はるか……ンン、遼、まで……、あたしのおちんちん、にッ‼　ああ、また、舐められちゃう。遼の口で、気持ちよく、されちゃうッ！」

幼なじみにこんな姿を見られるのも恥ずかしいはずだが、伊音に舐められたせいで希美乃の抵抗が弱まっていた。それに彼女はペニスをはるかにしゃぶられるのが初めてではな

いようだ。恐らくこの前、彼女の錬気を暴走させてもう一つの姿である両性具有の鬼神へと変えてやったときのことだろう。

一応腰を引いて拒む素振りをするが、緩慢な動きはすぐに捕まってしまう。今まで伊音が咥え込んで唾液と先走り汁でべちょべちょな男根をはるかの舌がしゃぶり上げる。

「ふう、あはぁ、希美乃にょ、ひゅふひゅふ、震えへりゅ。ああ、いっふぁいお汁垂えへふゆひ。気持ひいいんらね？」

あえて唇に咥えず、根本から先端まで満遍なく舌を這わせ窄めた舌先で亀頭の裏筋を丹念にくすぐる。鈴口を小鳥のキスでちゅぱっと吸い上げた次の瞬間には、その唇で玉袋をついばみ、手のひらの愛撫を加味して希美乃をよがらせた。

「あ、ああぁッ、えっちぃ。遼の舐め方、エッチっぽい……ッ!!」

「はむぅ……ふぉんなぁ、ボ、ボクは、べちゅに……。あふぅ……」

希美乃からの賛辞に恥じらいながらも、舐めしゃぶる動きは止められないらしい。音が聞こえてきそうなほど激しい鼓動に、胸の美巨房を弾ませて舌を蠢かし、無意識に動いてしまうのか悩ましく尻をくねらせる。

（ほんと、遼くんおちんちんの舐め方、えっちだ……。希美乃さんも、気持ちよさそう）

二人の様を見て、胸の動悸が激しさを増す。長い付きあいならではの息の合った淫靡さにちょっとした嫉妬が湧き上がった。

疼き続けている下腹の奥からもう何度目か分からない熱い感触が、じゅわりと染みだし

て股間をじっとりと潤ませる。
「そうやって舐められるの、好きなんだ。希美乃さん……。ぼくの舌と、遼くんのとどっちが気持ちいい？」
対抗するように再び唇を寄せると、伊音ははるかと共に少女の勃起肌へ舌を躍らせた。
くちゅ、ぴちゃ、ぬちゃ、れろ、ちゅる、にゅぷ。
「ひうっ、あ、やあ、二人で、両方からッ！　あ、んっ、だめぇ。そこ、熱くなっちゃうっ!!　おちんちん、ますますたまらなくなるうっ！」
脈打ちが間断なく続く太幹で、舐め這う舌同士まで絡みあう。
間近に迫ったクールな美貌から甘い吐息が溢れ出て、男根の潮臭と入り混じって匂い立つ。目が合うとはるかは恥ずかしそうに視線を伏せるが、自分も羞恥が込み上げて同じように目を伏せてしまう。けれども舌の蠢きはますます激しさを増し亀頭溝を両側から穿り舐め、向こうが裏筋を攻めると同時に鈴口を吸いながら押し広げてやった。
「んああっ、気持ちイイの、続きすぎィッ！　これ以上……ダメ、なる、おかしくな、るっ!!　ふあ、もうっ！　あ、あああぁ、もぉおうッ!!」
希美乃の悶えは激しくなるばかりだが、決定打の甘美が与えられずいつまでも二人掛かりの蠱惑に翻弄され続けるだけだ。
いつまでも口で弄び続けていたいが、そろそろ射精に導かないと可哀想だ。
手で扱こうかそれとも……。じゅん、とまた潤みを増した股間に鼓動が高鳴る。だが、

「希美乃、これ、気持ちイイって、言ってくれた、から……」
はるかがおもむろに体操着を捲り上げた。
ブラジャーも押し上げて完全にさらけ出した撓わに実る二つの白房。
両手で割り開いたその深い谷間へと、幼なじみの男根を挟み込む。
「ふぁぁぅ!! はぁあ、おっぱいっ! 遼……の、はるかの、おっきいお乳ッ!! あう、柔らかいッ。あたしのおちんちん、とろけちゃう〜〜っ!」
弾力と柔らかさを兼ね備える房狭間に希美乃が感極まると、さっそく女体化剣士が撓わ房を上下に揺さぶる。幹肌をぐちょぐちょに濡らすヨダレが潤滑をもたらして、心地よい擦れ感を生み出すのだろう、鼻にかかった喘ぎが激しさを増す。
(ふわあ、す、凄い……遼くん、あ、あんなこと!! 女の子の身体にも、ぼくよりずっと慣れてるし……。そ、それに、おっぱい……あんなに大きいから、あんな……胸でえっちなことっ。で、でも、ぼくのじゃ……)
自分の胸を見る。女体化してもほのかにしか膨らまなかった乏しい胸では、無理な芸当だ。自分どころか、真の女性である希美乃よりも大きなサイズを誇るはるかの巨乳だからできたパイズリである。
無謀なチャレンジはやめて、伊音は乳の谷間から顔をはみ出させた亀頭の先端を、最初のように唇へ咥え込んだ。
「ひっ! はううぁああっ、そんなっ!! こんなっ、ときに、咥えッ、あう、ふぁああう

っ。あうっ！　ふわぁあああぁっ!!」

今度は深くまで頬張ることができない代わりに、唇で雁首を締めつけるようにしてやった。巨乳房に扱かれる官能がそこで圧迫されてひとたまりもなく、希美乃の嬌声が切羽詰まった。アヒル座りのまま身を震わせ、断続的にビクン、ビックンと跳ね上がる。

もう尿道まで込み上げてきている証拠だ。

ぷにゅっ、にゅるっ、しゅぷっ、にゅち、にゅちゅ、にゅくちゅ！

それに気付いたはるかが、パイズリストロークを速めた。

くっちゅちゅ、れろ、ちゅぱ、じゅるる、ちゅぷちゅぷちゅぷ、じゅずず、じゅろん♪

唇の締めつけは緩めずに舌で裏筋から鈴口まで高速でしゃぶりまくった。

男の一番感じる部分への集中攻撃。

クリトリスの壮絶な快楽を知る少女には、これくらいしてやらないとイッてくれない。

（んふうっっ、ん、あああぁっ、また大きくなったあ。希美乃さんちんぽっ!!）

いよいよの予感が押し迫る。ペニスの興奮に、性別が変わった身体が反応してスラックスの足の部分まで溢れかえった愛液でぐしょぐしょだ。

亀頭が脈打つたび、伊音の子宮まで狂おしくうねる。

はるかも同じ状態らしい。無我夢中で乳房を弾ませながら、膝をついて迫り上げた尻をくねくね悩ましく振っている。内腿がびっしょりだ。

「ああっ、やッッ、もうダメぇえっ!!　くるっ！　出ちゃうッ!!　おちんちんっ、もうっ、

あぁあああああぁぅぅぅぅっ！」

とうとう希美乃が限界を迎えた。一際激しい痙攣に身を捩らせ悲鳴を張り上げる。

――どびゅうううっ、どぴゅっ、びゅびゅびゅるびゅる――――――ッッ!!

「くふぁあああぁっ！」

「あぶうううっ、んぁあばぁああっ！　んぶっ、ふぁあうううう～～～～～～ぅッッ!!」

夥(おびただ)しい量の精液が希美乃の怒張から激しくぶちまけられ、伊音の喉奥を叩いた。

どろどろの濃厚さと煮えたぎる熱さに噎(む)せながら夢中で飲み下すが収まりきらず、可憐なほっぺがぱんぱんに膨らむ。息苦しさにぶへぇッ、と吐き出すと、真珠色の白濁がペニスを挟んだままのはるかの乳房に降り注ぎ、べっとりへばりついた。

（ふああ、口の中ぁ、いっぱいっ！　希美乃さんの、精子ぃ。女の子の精子がッ、ぼくの……。ああぁ、飲んじゃったぁ、お腹に……精子、ひうっ!!）

口の中から鼻腔まで、脱力のカルキ臭に染められ朦朧とする。

（やっぱり、これも……全然、違う……。男のとき、と……。こんな、いっぱい、射精(だ)された、のに……もっと、欲しい……。こっち……にも……）

男の姿で遼にフェラチオをして精液を飲んだこともあるというのに、女の身体となって口いっぱいにぶちまけられた希美乃の精液が官能を呼び覚ます。

口から飲み下した精液に孕まされてしまうような錯覚に陥る。

下腹の奥で疼く器官にもぶちまけて欲しくて、もじもじと物欲しげに股を擦りあわせて

尻をくねらせた。悩ましい欲求が脳裏を満たした瞬間、
「ふぅううあぁぁあああぁぅッ！　んうっ、はぁああンンンッ!!」
ぷじゅっ！　びじゅぶじゅびゅじゅじゅ――ッ!!
膣に挿入されたわけでもないのに、自分で弄って慰めたわけでもないのに、絶頂の潮汁がキュンキュンと緊縮する陰部から溢れ返った。
（あ、ああ、あぁ、う、そ……ぼく、イッ、ちゃった……あ？　希美乃さん、の、精子……飲んで……？　女の身体で、ぼく、絶頂、しちゃったぁ……）
ぼやける視界ではるかもまた、伊音ほど深くはないが何度も押し寄せる絶頂の波に股間を打ち震わせ、スカートに染みを広げていた。
とぷとぷとまだ白濁の汁を滴らせながらも勃起を鎮めてきたペニスに、放心した瞳を漂わせる。その希美乃の手に優しく髪を撫でられながら、伊音はどこまでも昇り続けるような女の絶頂感に、甘い吐息を弾ませていた。

服の持ち主らしい女生徒が戻ってきて、金切り声を張り上げた。
「ああッ‼　あなたたちっ、更衣室は立ち入り禁止区域ッ！　失格ッ‼」
その声に審査員が駆けつけてきて判定を言い渡す。
「ひいっ、助けて。ああ、やめて、タイツ引っ張らないで、いやぁあああああっ‼」
「お、俺はこいつにそそのかされて、ちがうんだ、俺は悪くないッ！」
見苦しいことこの上ない悲鳴を張り上げながら廊下へと引きずり出され、女子たちに踏まれたり蹴飛ばされたりの制裁を加えられる無様な気配が伝わってきた。
哀れに思うがこれっぽっちも同情できない。ヤツらが連行されていき取りあえず一安心なのだが、まだここから出るわけにはいかなかった。
「あ～気持ち悪い。ほんとどうしようもないわね、あいつら」
「もう少し来るの遅かったら、あたしの制服触られてたと思うとゾッとするわ。あんなやつの手汗に汚染された服なんか着たら、変態がうつっちゃう」
更衣室に戻ってきた女生徒たちが着替え始めたのだ。
「私らもイベント出ればよかったかも。結局、みんなそっち参加しちゃってて、部活も中止になっちゃったし」
「でもどうせ結末は一条はるかと坂谷希美乃の一騎打ちでしょ。水中騎馬戦の時のあんな戦い見せられちゃ、全然勝てる気しないわよ」
すいません、その片方は今ここでロッカーの中に隠れています。それに今回は結女がお

びき出した鬼を捕らえるのが目的なので、勝利はまったく狙っていない。
「あ、でも、あの子。編入してきた男の子、一条結羽くんだっけ？　彼と一緒にチーム組めるんなら、参加してもいいかな～」
「ああ、あの一条結女の双子の弟だっけ、兄だっけ？　彼、かっこいいよね。結女みたいにちょっととぼけたとこあって可愛いのに、はるか並の運動神経にイケメン顔！　こんな時は普通の共学校みたいにクラスも男女混合だったらって思うわね。ああ、結羽君と一緒のクラスになりたいっ!!」
　自分たちの話題をこっそり聞くのはドキドキしてしまうが、結女が褒められるのはたとえ男性化した姿に対してであっても嬉しくなる。
「そういえば一条家、もう一人いたよね。えーっとなんっていったっけ？　男で、なんか印象の薄い」
「えー、そんなのいたっけ？」
「いたよ、ほら、りょう……なんとか。龍馬、だっけ？　なんかそんな感じの名前の」
「ああ、そういえばいたね、そういうの。確か結女と従兄妹同士で付きあってる。どんな顔だっけ？　でも、そいつって確か、さっきの変質者と仲いいって聞いたけど」
「え～、うそぉ、なにそれ、気持ち悪い～～～～～～ッ!!」
　珍しくはるかではない自分の話題が女子の間に上ったと喜んだ遼だったが、散々な言われようにがっくり落胆する。闇の中で表情は見えないが、渡辺が必死に笑いを噛み殺し身

を震わせていた。――彼女らが言う変質者と仲よしな中には、お前も含まれているんだぞ！

話題がコロコロとその場のノリで変わりながら、話がいつまでも続く。イベントのせいで部員の欠席が多く部活が中止になったため、その分時間が空いたのだろう。彼女らは着替える速度もゆっくりに、おしゃべりモードに突入していた。

「それにしても狭いな、ここ……」

外に漏れない程度の小声で呟く。いくら女体化して男の時より華奢になっているとはいえ、ロッカーの中に二人入るのは無理すぎた。しかも抱きあうように身体を密着させて一緒にいるのは渡辺なのである。向こうも女の身体になっているおかげで嫌悪感は皆無なのだが、それでも気まずさが拭えない。

「まったくだよ。なんで一緒のロッカーに入ってくるんだよ！　俺がここ開けたんだから、お前は隣にするとかしろよまったくもう!!」

やはり小声で、不機嫌というよりは戸惑う口調の渡辺が文句を言ってくる。

「ちょっと待てよ！　ここ開けたのはボクだぞ。お前こそ勝手に先に飛び込んじゃったんじゃないか！」

などと抗議するが、実のところ慌てていたため記憶は確かじゃない。

恐らく渡辺も同じだろう。こういうことは後から言い争っても、実際どうだったかなんて分からないものだ。そんなことより、

「ンンッ！　ふぁ……ぅ。ば、ばか、こんなところで動くな、ってば……」

不意に〝彼女〟が動くから、ギュッと密着した乳房が擦れあう。制服越しとはいえ、ブラの中で乳首が転がる感触に電気のような刺激が走った。
我慢したのだが背筋がピクンと打ち震えて悩ましい喘ぎがこぼれた。
「しょ、しょうがないだろ、こんな狭い中でじっとしっぱなしなんだから。それより、おまえこそ変な声出してんじゃねーよ」
そういう渡辺の声だって妙に色っぽく上擦っていた。
しかもヒソヒソ声なので、余計になんだか淫靡な感じがする。
「う……うるさいな、女の身体は男よりもずっと敏感になってるんだから、仕方ないだろ。特におっぱいとか、あそことか、我慢なんか絶対無理なんだから」
女の身体になっている時間は遼の方が圧倒的に長い。
「な……なに言ってんだよ！　変な……こと、言うなっ!!」
生々しいことを言ってやると、渡辺が狼狽えて声を上擦らせた。
正体が遼とばれてしまったが、彼の一目惚れの相手であるはるかの姿で際どい言動をされると、動揺が抑えられないようだ。
（ボ、ボクだって……恥ずかしいんだから……）
意識してしまうと、お互い押しあうようにして拉げた乳房の感度がより高まったような気がした。大きさははるかほどじゃないが、鍛えているだけあって弾力の強い膨らみが、ぐいと押してきている。

「……な、なあ、お前、その身体……ってさ、触って確かめたことあるのか？　その、感度とか、どんな風に感じる……とかさ」

しばらくの沈黙の後、言いづらそうな口調で渡辺が尋ねてきた。暗くてよく分からないけど、多分〝彼女〟の顔は今真っ赤だ。

女体化して間もなく、はるかは自分の身体に興味を持って女の快感を試してみた。男のものとは大違いの鮮烈な快感に、毎晩自慰に耽る困った癖ができてしまったのだが。

（こいつ、女の身体でオナニーとか、してないのか……？）

自分以上に色々と試しそうな親友の思いがけない控えめさに、ちょっと面食らう。

屋上で女体化したばかりの時とか、風呂場でもかなり大胆に身体をまさぐっておいて何を今さらと思うのだが、もしかして動転の余りの行動で覚えていなかったのかもしれない？

「なんか、女の身体の感覚とか、気持ちよさとか知っちゃったら、自分じゃなくなっちゃうような気がして……。俺、男なのに、女じゃないのに、女の身体で女の気持ちよさ、知っちゃったら……。このまま心まで今までとは違う女のようなモノになっちゃうって」

そういうことを考えなかったわけではない。

けれども、今渡辺が感じている恐怖のようなものを抱いたことはない。

（昔っから女みたいって言われてたからかな？　それともボクが鬼斬姫だから？　そういうことで悩んで結女を護れなくならないようにかな……）

どう答えたらいいのかと、返答に困ってしまう。
（こいつとボクとじゃ考え方も感じ方も違うし、まさかオナニーを勧めるわけにもいかないしなあ……）
抵抗感があるなら、あの強烈な快感はむしろショックを受けてしまうかもしれない。
対処に困り戸惑っていると、
「こ……こんなこと、されると、やっぱり気持ちいいのか……？」
渡辺がおもむろに乳房を揉んできた。
「――ふあっ!!　なに、す……る、やめ……、ふぁ、あ……」
身体の幅からはみ出した横乳を両側から手で捏ねながら、自分の弾力が強い膨らみをくねらせ刺激してきた。めり込む指先に柔肉を掻き乱される快感と密着した弾力肉同士の溶け混ざるように拉げる感触が脱力的な心地よさを呼び覚ます。
幸いおしゃべりに興じていて気付かれ難くはなっているが、これ以上喘ぎ声が大きくなると外の女生徒たちに聞こえてしまう。
「やめろ……ってばぁ……」
下乳から側面へと外周をなぞりながら、膨らみを穿り返すように蠢かしてくる。ますます調子に乗ってきた指を払い退けようとするはるかの手が、目測を誤り渡辺のおっぱいに触れた。指先が張りのある膨らみにぷにゅんとめり込む。
「あンンッ!!　お、あぁ……。なんか、頭、痺れて……、一瞬、意識飛んだ……」

親友の身体が小刻みに打ち震えた。甘酸っぱく蕩けた溜息に混じってこぼれる囁き声が悩ましく震えている。

「今の、俺の、声……？　女の……エッチな、声……」

自分が放った喘ぎ声にショックを受けたようだ。けれどもその一方で、そんな甲高く上擦った小さな悲鳴を意図せず放ってしまった自分に興奮している。女の身体で味わう、男では絶対体験できない快感に夢中になっていた。

固く勃ち強張った乳首の感触が制服の向こうからはるかの巨房に当たっている。

（こいつ、おっぱい触られて、興奮してる……!?）

性別が変わった身体で今までとは比べものにならない快感を初めて味わった。その時の衝撃的な驚きと悦びを思い出し、はるかの乳首も屹立（きつりつ）して渡辺の弾力房にめり込む。

「はぁううっ、なんだよ、これ。胸……が、こんな気持ち、イイッ、なんてぇ」

指を蠢かせてあげるごとに、渡辺の吐息が熱を増す。微かな隙間から差し込む外の光に、清純そうな顔立ちがしどけなく呆ける様が垣間見えた。

（うわ……あ、エッチな顔してる。ボクに胸揉まれて、感じてる……）

倒錯の興奮にはるかの胸が一段と高鳴る。

もう男の姿での面影などまったくない。それは乳房を刺激されて甘美にのめり込む少女の姿にしか見えない。けれども自分が、凛々しい顔立ちの美少女となっても一条遼であるように、彼女も心は渡辺綱吉のままなのだ。

（そう……こいつは、女の子じゃなくて、渡辺……だ。ボクもこいつも、男だぞ！　なのに男同士で、こんなこと、するなんて‼）

そうは思っても、身体はどうしようもないほどに、極上の女の子同士。快感の喘ぎが甲高く甘く揺らぐ。

狭いロッカーの中。お互い制限された動きで、刺激する箇所もお互い集中的になってしまう。しかも乳房の正面同士は常に密着しているので、浮き立つ快感の絶え間がない。

「ふあっ、は……あ……ン、く……ふぁ、あ、はぁ、あんっ‼」

身体がくねると充血した敏感乳首が交差して、何度も何度も衝突しあう。そのたびにお互い息を詰まらせ、感電したように震えながら脳裏を白く染める。

（渡辺の奴、エッチな喘ぎ……声。顔だって、そんなエッチな顔ッ。ふあ、で、でもボクも、同じか……。エッチな女の子の顔……して、エッチな女の子の、声で悶えてるッ‼　んふ、ぅう〜）

お互い男と意識しながら、ことさらに甘い少女の喘ぎを溢れさせると倒錯的な官能にゾクゾクと震えが止まらなくなる。

さらに過剰な甘美を欲して、指が相手の房肉を弄ぶ。

「ん……ふぁ、あ、はぅッ、よ、横乳、寄せるなあっ、そんなことされたら、はうンッ」

互いの乳房同士の密着が高まって、大きくて柔らかい分だけはるかの方が締めつけられるような圧迫感に悩まされる。房の奥の切ない疼きが下腹の蜜壺と連動して、じゅんと愛

液を湧き出させ股間を火照らせた。
お返しとばかりに渡辺の乳房を裾野から絞り上げるように圧迫してやると、
「ひっ⁉　ふ、あ、お、あぁぁ……あ……ンンッ‼　は、わぁ、何か、溢れ……ンッ」
その刺激が子宮にまで響いたのだろう、濡れたらしく彼も股ぐらをもぞりと蠢かし戸惑いの声をこぼす。
「ふあ、あん……だ、これ……？　熱いの、何か、出て……。ああぁ、ちんこ、なくなった、はずなのに、疼いて、熱いのが。あ、あああぁぁ」
愛液の滴りと共にクリトリスの勃起を知覚して、未知の惑感に当惑する。
「女……は、感じると濡れ……るんだよ、ま、股が……」
一瞬女性器の名を口走りかけたが、自分まで倒錯の興奮に意識が飛んでしまう予感に襲われ穏やかな表現にする。
「ひ、あ……？　濡れ……。俺が⁉　俺、女だから、濡れちゃってる……ま〇こ、濡れて」
それなのに渡辺がはっきりと口にしてしまった。股間から消え失せたペニスの代わりに、ぱっくりと割れ開いた神秘の花弁谷。その奥に綻んだ小さな口から子宮へと至る狭い穴管が、男性器を迎え入れるために熱くヌルヌルとした潤滑の汁をたっぷり分泌させている。
男に抱かれる用意が整ったことを、男の意識のまま女の身体で自覚した。
腰から下が気怠(けだる)い脱力に見舞われ、狭いロッカーの中、背中を寄りかからせていなければへたり込んでいたに違いない。

中途半端に脱がされた感じが何だか情けない気持ちにさせられる。
逃げようと前のめりになるが、細腰を両手でしっかり捕まえられた。
乳房を解放されたのはよかったが、なぜかもどかしい疼きが乳首から膨らみ全体へと広がる。男の力で藻掻く身体を易々と引き寄せられ、尻肉の狭間に灼熱の太肉がめり込む。
「ひぃいぅっ！　結女……はボクのカノジョで、ボクがカレシ、だぞっ!!　こんなの、おかし……あ、あああっ！」
一瞬、肛門に肉鏃の切っ先が当たって、危うい緊迫の感触に息が止まった。
溢れた愛液で尻までぬちゃぬちゃのねとねとだ。その潤滑に任せて蟻の門渡りを滑ってくる亀頭の感触に、溢れそうになった悦欲の喘ぎをどうにか堪えきる。
「せっかくボクにおちんちん生えて、遼ちゃんオンナノコになったんだから。こんな時くらい交代だよ。ボク、大好きな遼ちゃんの膣内に、おちんちん挿入(いれ)たいよ!!」
「そん……な、結女……、ボク……は。――はああうぅぅッ！」
幼い頃から想い続けてきてようやく結ばれた恋人に、そんなことを言って求められたら抗いきれなくなる。
それでもカノジョのペニスに女として犯される抵抗感に、訴えるような声を上げるが、女花へとたどり着いた肉蛇が蜜に蕩けた花弁を押し開いて、小刻みに震えながら口を開く陰洞に埋まり込んできた。
（ふぁあああっ、挿入(はい)っ……てッ、き、たッ、結女の……お!!）

亀頭がめり込んだだけで、待ち望んでいた甘美に膣穴全体が打ち震え喜び窄まる。
「あ、はぁぁ……遼ちゃんの、膣内ぁ、狭い……ッ！」
ぬぶ、ぬぷぬぷぬぷ、ぬぶずぶずぶずぶぬぶぶぶん!!
「ほぅぁあっ、膣内ぁくるッ。結女の、あああ太いっ、奥ぅ、挿入ってくるううっ！」
「はぁああんっ、締めつけて、きてるッ！　遼ちゃんの膣ッ、私のおちんちん、ギュッて締め付けてるっ!!　ああぁ、これが男の子の、挿入る感触ぅっ。女の子の身体、で挿入られるのだと、バラバラに意識、飛んじゃうけど！　女の子にっ、遼ちゃんに、挿入るの、キュッて、熱いのに包まれてッ、き、気持ちいいっ」
わざわざ一人称を女の時に戻して、自分の股間に生じた男性器の名称を声に出すから、倒錯的な興奮が一段と膣壁を収縮させる。
結女のペニスは遼の男の時の物より大きく、奥へ埋まり来るにつれ穴壁全体が窮屈に押し広げられて、切迫的な快感をもたらす。
自分の男根はちっぽけな陰核へと変じ、フルに勃起したというのに包皮すらも脱ぎ下ろせずただ感度だけを高めて子宮を疼かせている。
（うう……なんで、ちんこ、のせいで……っ、こんな気分になっちゃうんだよ！　ああ、ちんこがおま○こなんかになっちゃったから、女と同じ……反応しちゃうっ!!）
それなのに結女の存在感満点な極太は、はち切れそうなヌメり壁を大きく張り出た亀頭のえらで掻き上げて、遼の膣内から女体の快感を穿り出す。

（あ、あああっ、どうしようっ。結女にちんこ挿入られて……ッ、こんなぁ。ゆめの、太いの……ンンッ、ふぅぁ、ボクの膣内、埋まってる……ぅ!! 身体、女、なったからっ、結女のちんこ、中に挿入っちゃうッ！ ち、ちんこ挿入る身体になっちゃってるっ）

意識するとますます倒錯的な興奮が、肉体の感度を押し上げた。

根本までいくにつれ太さを増す剛肉がみっちり収まり、穴奥の壺器官を圧迫する。

「ふっ、ふぇあああぁ〜〜〜〜っ！」

下腹部全体がうねるような熱帯びた快感に背筋が弓なりに反り、尻がツンと迫り上がる。そうすると勃起の竿裏がヴァギナの内から膀胱を圧迫しますます気持ちイイ。

（へぁあぁ、は、あぁぁ……、こ、これぇ、女の、感覚ッ。ボク、男なのに、おま○この奥ぅ、ぐ……ッとされて……、お、おしっこ、漏れそう……なるぅ）

だらしなく顔をえへらと弛緩させ、開きっぱなしの口からヨダレを垂れ流す。

男であるという意識は薄れることなくあるのだが、女体化するたびに女の快感に染められて女っぽい乱れ方をしてしまう。

またしても焦点を失いかけた瞳を漂わせると、錬気の繭の外からはるかの痴態を驚きの表情で見詰める幼なじみと視線が合った。

「ひうっ!? き、希美乃ッ。伊音……くん、渡辺、まで……。はうぅ、見ないで……ッ」

向こうの声もこちらからの声もお互いに聞こえない。

だがそれだけに今のこの状態への言い訳が伝えられない。

女の子になった身体を、男となった恋人に犯され心地よさそうに喘ぐ。
その官能に弛んだ情けない顔付きを、見られてしまった。
耐え難い恥ずかしさが込み上げる。
「ボクにおちんちん挿入(いれ)られて気持ちよさそうにしている遼ちゃんのあまりの可愛さに、みんなびっくりしてるんだよ。うふふ、イイ気分。もっと羨ましがらせてやろうね♪」
負の感情が暴走した結女は、恋人を奪おうとする泥棒猫として皆のことを見ていた。
そのため呆然と見詰める彼女たちの前で、遼を独り占めできることが嬉しいらしい。
細腰へと回した腕で愛おしげに抱きしめながら、結女ははしゃぐようなストロークを勢いよく繰り出してきた。
「ふわわぁああっ!!　結女ッ、ダメッ、う、動いちゃっ！　あ、ああっ、やッ。み……んな、見て……るのにッ、ひぁ、あああぁ～ッ。ああっ、膣内(なか)ぁ、だめぇえええぇっ!!」
ぬぶっ、ずぷ、ずぷずぷずぷっ、ぬぶんっ、ぬぶんっ！
一突き目から血液が逆流するような快楽の衝撃が全身を揺るがした。
太幹が肉筒を押し広げ、引くときも突き込むときも大きく傘を広げた亀頭縁が壁襞を抉り返し、震える喘ぎが抑えられない。
(うぁあぁ、すごいィ。結女の、ボクの膣内(なか)ぁ、キツキツ、いっぱいィ！　こんなの……に、膣、擦られたら……。あ、ああ、ふぁあっ、身体ッ、抑えられないっ!!)
ただでさえ量が多かった愛液がさらに分泌を増して、極太が埋まるたび、ぷじゅっ、び

ちゅ、と膣口との隙間から飛沫を散らす。
「ふぁああ〜、ヌルヌル……なのに、キュッって締めてくる。遼ちゃんの膣内(なか)ぁ。そっかぁ、こういう気持ちよさなんだ、おちんちん締めつけられる……って。癖に、なりそう」
「――締め……ッ!? ボクの……あぁ、結女の、締めてる? そんな、違う。そんなの」
信じられないが確かに膣壁が、はるかの意志とは関係なしに断続的な強い収縮を繰り返している。そのたびに男根と膣襞の密着が強まって、快感もその分跳ね上がった。
(く……ふ、あ……ぁう、ほんと、だぁ。ボクのま○こ、結女のちんこ、気持ちよがって……キュッて、なるうぅぅっ! ハァンッ!!)
意識すると余計に収縮が激しくなった。その窄まった穴を押し広げられ織りなす官能襞を捲り返されると、腰がくねるのを抑えきれない。増した抵抗に愛液のヌルヌル感が最大限に引き出され、いても立ってもいられない心地よさが沸き立つ。
「えへ、あそこがおちんちん締めつけちゃってると。自分までキツキツでたまらないでしょ? そんな時にこんなことされちゃうとねぇ……、すっごいんだよ!」
ヌプヌプヌプッ、ズボッ、ズプズプズプ、パンパンパンッ!!
いきなり結女はピストンを高速にしてきた。
「――ひわあぁっ!! ああっ、だめっ、ほぅううぁ、強ッいッ! ンンッ、おっ、ああっ!! ふんんんんッ! やらっ、強すぎぃ、これ、ふぁああ、ダメダメッ、だめぇえっ!!」
膣壁と竿幹のヌルヌルして窮屈な擦れ感だけでも喘ぎが抑えられないのに、硬く充血し

た亀頭が容赦ない乱打で子宮を責め立てた。
「頭飛ぶッ！　頭、飛んじゃうッ‼　あああぁ、奥、いっぱい当たってッ。んふぁっ、これ以上ッ、変になるッ、はぁああひいいっ！」
ズンズンズンズンと重く悩ましい衝撃が内臓までも揺るがし、身体の内側から全てを官能に染められてゆく。前屈で釣り鐘を逆さにした形状で垂れ下がった乳房が、突き込まれるリズムに合わせ制服をはだけさせて揺れ弾む。
（あ、あぁぁっ！　結女ッ。こ、これって、ボクが結女にしたのと、お……同じ、エッチの仕方っ⁉）
恋人同士、セックスをするようになって遼は彼女が気持ちよさそうに乱れるやり方を工夫してきた。それを今、男となった彼女から、そっくりそのままにやり返されている。
（ひうっ、あ、は……んぁあぁっ、こ、こんな、感じ……だったん、だ……結女ッ、ボ、ボクにされ……てっ。ふぁああうっ！　こん……な、はぁあぁンンッ‼　はひッぃ）
彼女が感じていた快感をそのままに味わわされる。
今の自分は感じやすい膣と子宮を備えた女の子で、男へと変わった彼女に犯されたら快感を堪えられず乱れ悶えてしまう身体だということを思い知らされた。服の下でブラがずれ、ブラウスの裏地と充血乳首が直接擦れあう。
熱い痺れに身悶えながら子宮をコンコン弾かれる毎に淫らに崩れる表情を、希美乃たちが驚きの眼差しで凝視していた。

「見られ……てるッ、恥ずかしいッ!!　結女ッ、ひあぁ、結……女ぇッ、突くの、やめてぇええっ、奥ッ、突く……ふぉおおンンッ！　抜いてッ、太い、これぇ、へぅんッ!!」

渡辺のヨダレを垂らしたスケベ丸出しの凝視が鬱陶しい。女体化して恥ずかしがり屋になった伊音の顔真っ赤でまじまじと見詰める視線に、こちらまで羞恥が高まる。

それよりも、女の身体で膣を突きまくられ悶える一部始終を、幼なじみに見られるのが耐え難い恥ずかしさだ。

「嘘はだめだよぉ、遼ちゃん。動いたらますますキュンキュン締めてくるしぃ、遼ちゃん自分からもお股押しつけてきてるんだよ。抜いて欲しくなんかないくせに～」

それは肉体の話だ。確かにこのままずっとヴァギナを勃起肉にストロークされ子宮を絶えず突きまくられていれば、気持ちよくてたまらないだろう。けれども自分は結女のカレシだという気持ちが、どうしても性別逆転したセックスを恥ずかしくさせる。なのに、

「遼ちゃんの恋人は私なんだから。それなのに横取りしようとする悪い虫たちに、思い知らせてあげよう。ボクとはるかの仲のよさを、見せつけてあげよう！」

希美乃たちの視線から顔を隠すように前屈を深くさせる女体化少年の上半身を、結女が強引に引き起こした。

「ふあッ!?　はぁあああっ!!」

姿勢の変化が硬くそそり立った陰茎の当たり具合を変え、膣内の今までとは別の部分が圧迫される。

「ンンンゥウッ！」
しかも結女が強く抱きしめてくるので挿入の深度がさらに深まって、子宮の激しい圧迫に息が詰まった。
ビクビクと身体が痙攣し、ヴァギナからはぽとぽとと愛液が量を増して滴り落ちる。
上体を引き起こした恋人の手は制服をたくし上げてその下へ潜り込むと、ブラからこぼれ出た巨乳房を直接に揉み始める。
「ひあぁぅううっ！　や、ああぁっ、だめっ、おっ……ン胸ぇえ揉む、なぁっ!!」
おっぱいと言いかけて言い直す。自分は男だ。胸を触られるなんておかしい。けれど、乳首を指先に摘まれコリコリ弄られながら房を捩られると脳裏が白く染まる。
立ちバックの深い挿入に応じてストロークも変化し、真上に勢いよく弾き上げて再開された。今までが子宮をノックされる感じだったとすると、今度は殴りつけられるような衝撃が狂おしく悩ましく牝器官を追い詰める。
ズッ、ぷッ、ぬぷッ、ずぶッずぶッずぶっ、ズンッ！　ズムっ、ズブッ、ズブブンッ!!
「ほぉぅぁあああっ、ンンッ、ヒッ！　ハウッ!!　んっぁはああっ！　や、ぁああっ」
突き上げられる毎に、理性が飛んだ。乳首を抓られ意識が戻ると、また鋼のように勃起した剛直亀頭が、ズンと重々しく潤み壺を響かせ思考を白熱で満たす。
そんななかでも、瞬きも忘れ見入る希美乃たちの視線ははっきり知覚していた。
「ふぇあ、みにゃいれぇ。こんにゃ、感じまくりゅの、見ひゃイヤぁあぁっ。んぉあっ」

膣汁が呆れるほど出ているのに襞壁は締めつけっぱなしで、抽送する男根を窮屈にさせる。絶えず悶える身体はじっとり滲み出た汗でブラウスを透けさせ、その中で軟体動物のように愛撫に拉げる乳房の状態を覗かせる。

そんな様を、やはり希美乃と伊音と渡辺が目を血走らせて見詰めている。何事か叫んでいるようだがまったく聞こえない。もしかして淫乱と罵られているのではと想像し、嗜虐の甘美が身震いを呼んだ。

「あぁああっ、やっぱり、遼ちゃんに挿入るの……イイッ。遼ちゃんに挿入られるのも、素敵だったぁ。んふぁ、遼ちゃんだけ、が、私の恋人。私だけが、遼ちゃんの恋人だからっ！　あぁあああぁ――――っ!!」

ズプズプズププッ、ヌズッヌブヌブヌブ!!　パンパンパンッパンッッ、ズブンッ！

蠕動する膣襞の甘美に結女のストロークが勢いづき、光繭を構築する錬気の輪転が連動して速度を増す。

「ボ……ク、だって、はぁあんんっ、結女だけ、が、恋人……だからッ!!　ひっ、強ッ、あああ、奥ッ、いやあぁ～～。あ、あ、あ、だめぇ。そんな、されたら、もうっ！」

乳首と膣奥で同時に炸裂する甘美に息も絶え絶えになりながら、飛びそうになる意識を必死につなぎ止める。

拉げられっぱなしの子宮壺から、濃度を高めた悦感が迫り上がってきていた。

今にも弾けそうなその衝動を堪えていた膣で、結女のペニスが急激に大きさを増す。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

二次元ドリームマガジン

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

偶数月17日発売

コミックアンリアル

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

奇数月12日発売

コミックプリズム

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

2・6・10月下旬発売

メガミクライシス

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

奇数月中旬発売

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

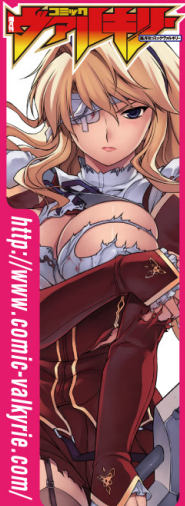
各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！